

アンデルセン童話の倫理観 ～「子ども目線」に立つキリスト教倫理～

田 島 靖 則*

抄 録

ジョーゼフ・フレッチャー (Joseph Fletcher) は、キリスト教倫理の規範は愛(隣人愛)にあることを強調した。しかし、彼の主張が愛に導かれてなされたと考える人は多くない。キリスト者の「生の規範」としてイエスが示したのは、愛だけではなかった。「はっきり言うておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない(マタイ 18:3)。」というイエスの言葉は、「幼稚性」というもう一つのキリスト教倫理の規範があることを示唆している。世界的な童話作家ハンス・クリスチャン・アンデルセン (Hans Christian Andersen, 1805～1875) の作品を足がかりとして、「子ども目線」のキリスト教倫理について論じたい。

Keywords: キリスト教倫理, 幼稚性, ハンス・クリスチャン・アンデルセン, 安楽死, 人工妊娠中絶

～緒言～

ハンス・クリスチャン・アンデルセン (Hans Christian Andersen, 1805～1875) は、デンマーク第二の都市であるフュン島のオーデンセで生まれた。貧しい家庭環境から身を起し、世界中の子どもたちを魅了するお話を書き続けた優れた作

家であると認識されている。しかし、英国の文芸評論家ジャッキー・ヴォルシュレガー (Jackie Wullschlager) が 2000 年に発表した新しいアンデルセンの伝記によって、それまでアンデルセンの自伝を中心に組み立てられていたロマン主義的な人物像とは異なる、生々しくも俗物的なアンデルセンの人物像が明らかにされた。

ヴォルシュレガーによれば、アンデルセンはひと言でいって「幼稚な大人」だったということになる。彼女は 1871 年の夏に、ペーテルスヘイのホテルで相客となった英国人女性アニー・ウッ

* Tajima, Yasunori
ルーテル学院大学非常勤講師
日本福音ルーテル雪ヶ谷教会牧師

ド (Annie Wood) の回想を引用して、アンデルセンがいかに「幼稚」であったかを克明に描いている。ウッド嬢がホテルに到着した日、夕食時に、新しい英国人女性客として食卓で最初に彼女に給仕が行われると、アンデルセンは黙り込み、ふくれっ面をし、食事を食わず、早々に退席する。彼は厨房に行き、召使いたちにこう言った。「もう自分を愛していないのがわかった。自分よりもイギリス人女性のほうを大事にするのだから」(ヴォルシュレガー 2000, p.375)。アニー・ウッドが、1875年に「スペクテイター」誌に投稿した内容によれば、アンデルセンは「感受性豊か」で「自己本位」で、「無邪気なうぬぼれ屋」で、「まるで、一家の厄介者にして喜びでもある、子ども部屋にいる巻き毛のかわいい子ども」のような存在であった(ヴォルシュレガー 2000, p.376)。

子どもが子どもらしくあることを許されるのは、彼らがまだ「大人ではない」からに他ならない。しかしアンデルセンは、大人であるにもかかわらず「幼稚」であった。しかしこのことは、日本語の「幼稚」という単語が多くの偏見にまみれているということも含めて、彼が単に未熟な大人であったということの意味するわけではない。彼の本性は、偉大な作家にありがちな「変人癖」の枠には収まらない「幼稚性」にある。

マタイによる福音書 18 章 1 節以下の箇所、イエスは「はっきり言っておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。」と明言している。新共同訳聖書で「子供」と訳されているギリシャ語の単語「パイディオ」は、幼児を意味する単語である(Bauer 1958, p.604)。隣人愛に代表されるようなキリスト教倫理の規範ではない、もう一つのキリスト教倫理の規範が「幼稚性」なのである。これについては異論も多く予想される。従来の聖書解釈では、ここで「幼稚性」と表現する「子供のようであること」は、単に「無力さ」「従順さ」と置き換えて考えられてきた。たとえば、20 世紀のドイツ聖書学を代表する注解書である NTD によれば、それは存在の卑小性の象徴であり、ただ庇護

され保護される存在であることを意味すると説明されている(NTD1973, p.493)。また 1990 年代米国で、エキュメニカルな普及版の聖書注解書として出版された IBC では、「子どものように」という言葉を、「神の子とされる」という意味に解釈し、「幼稚性」についての議論を回避してしまっている(IBC1998, p.1306)。しかしこれらは、果たして正しい解釈だったのだろうか。むしろイエスはここで、従前の「子ども観」を打ち破るべく、この言葉を発したと考えるべきではないのか。

米ヴァンダビルト神学校のボニー・J・ミラーマクリモア(Bonnie J. Miller-McLemore)は、2003年に発表した『子どもたちを来させなさい〜キリスト教の視点からの子ども性の再考〜』において、近代以前までのキリスト教の視点では、子どもは「原罪」を負って誕生する存在であり、その「原罪」によって子どもの「全ての意思」は制約を受けているとみなされていたことを指摘している(Miller-McLemore 2003, p.13)。しかし、近代以降になると、ジャン・ジャック・ルソーの考えに代表されるように、子どもはその本性において愛情深く無垢であると考えられるようになった。近代以降の子ども観は、それまでとは打って変わって「道徳的中立」「無垢」「神聖」といった定義が主流となる(Miller-McLemore 2003, p.14)。

しかし、福音書に見られるイエスの幼児への関わり方を見る限り、イエスが幼児を「神聖な存在」とみなしていたとまで言うことはできないだろう。どの幼児にも「罪の萌芽」を見ることはできる。このことに異論はないと思う。しかしそれでも、子どもは大人よりもはるかに素晴らしい。そのことをイエスは子どもをめぐる二つのエピソードをもって伝えている。一つ目は既出の「天の国で一番偉い者」についてのお話(マタイ 18:1~5, マルコ 9:33~37, ルカ 9:46~48)。二つ目は、ミラーマクリモアの著書名になっている、「子供たちを私のところに来させなさい。妨げてはならない。」というイエスの言葉を収録する「子供への祝福」のお話である(マタイ 19:13~15, マルコ 10:13~16, ルカ 18:15~17)。いずれも共観福

音書すべてに収録されているエピソードであり、異なった編集者の手を経てもなお、三つの福音書すべてに残されたという点で、そこに記されるイエスの言葉が、福音の本質に触れていることを物語っている。様々な倫理的決断もまた、福音であるべきだと考える。倫理的決断を福音とするために、「幼稚性」が必要なのである。

「幼稚性」は試行錯誤を許容する。なぜなら幼児という存在は、試行錯誤の中から自らにふさわしい正解を発見することが出来るものだから。「幼稚性」は、あらかじめ構築された思考の体系化とは相容れない。「幼稚性」は「原理主義」とは無縁なのである。倫理判断の「ふさわしさ」は、個々の存在が置かれた状況によって変化するという点で、「幼稚性」の倫理は状況倫理的である。しかし「幼稚性」が状況倫理的であることは、ジョーゼフ・フレッチャーが徹底的に合理的であろうと努めたのとは逆のベクトルを示している。「幼稚性」は決して功利主義的ではないのである（フレッチャー 1966, p.180）。

就学前の幼児たちとの関わりから、大人として学ばされることは数多くある。たとえばある四歳児は、「大人になったら何になりたいか？」と問われて、迷わず「カラス」と答える。彼にはカラスに対する一切の偏見が無い。彼はカラスが自由に空を飛び回るのを見て、その素晴らしいさに心惹かれているのである。もし心ない大人が、「カラスは縁起の悪い生き物だ」とか、「嫌われている鳥だ」などといらない偏見を植え付けない限り、彼はカラスをありのままに見ることが出来る。「どうせなら鷹とでも答えた方が良い」と考えるのは、小賢しい大人のいらぬお節介である。「心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。」というイエスの言葉は、自分を賢いとうぬぼれている大人たちへの、痛烈な皮肉なのだ。

アンデルセンが、学問としてキリスト教神学を学んだ形跡は見当たらない。しかし、彼の聖書への興味は、平均的なデンマーク人のそれを少し上回っていたようである。¹ 彼が最初に入學した学校

で体罰を受けたことをきっかけに、母親の判断により彼はユダヤ人学校に入學することとなった。² 彼はそこで6歳になるまで学んでいる。おそらくそこで彼は、旧約聖書に親しむきっかけを得ることとなったはずである。そのユダヤ人学校が閉校となった後、彼はキリスト教会が経営する救貧学校に通うようになった。その校舎の壁面には宗教画が飾られており、アンデルセンは学校での宗教の授業を好んだ。教師が聖書の物語について説明するとき、宗教画にはまるで命が吹き込まれるようだったと、述懐している（ヴォルシュレガー 2000, p.20）。

アンデルセンの宗教性は、デンマーク人の一般的な宗教性と大きく変わるところはなかった。つまり国教会であるルーテル教会（ルター派教会）への自然な帰属意識を持っていたと考えられる。そのことを示す証拠が、彼の作品「名づけ親の絵本」（アンデルセン 1874, 童話集 6）に現れている。

デンマークの宗教改革は1537年、国王クリスチャン3世の時代に起こった。ルターの95箇条の提題からちょうど20年。前のデンマーク王フレデリック1世が1533年に死去したとき、デンマーク議会はローマカトリック派が多数を占めていたため、熱心なルター派信徒であった王子クリスチャンの即位は認められず、ローマカトリック派の諸侯は結束し、ドイツのリューベックで反乱軍を起こしデンマークに侵入した。反乱軍の指揮者はフォン・オルデンプルク伯爵であったため、これは「伯爵の乱」と呼ばれる。この反乱軍の敗北によって新しいデンマーク国王クリスチャン3世が誕生し、デンマークはルーテル教会を国教と定めるルター派の国となった。アンデルセンは、その作品『名づけ親の絵本』のなかで、現状維持派だったフレデリック1世の前任者、進歩派・改革派のクリスチャン2世について次のように述べている。「王の血のなかには火が燃えていて、王の考えにも火が燃えていたのです。王は古い時代と手を切り、農民のくびきを打ち碎き、市民たちの友となり、『どん欲なタカども』の翼を切ろうと考えたのです。しかし、タカどもの数はあまりに多

すぎました。こうして王は今、故国を去って友と同盟者を求めて外国にゆかれるところなのです」。宗教改革・政治改革を完成できずに故国を追われたクリスチャン2世について、当時のローマカトリック派の修道士たちには次のように語らせている。「おんみは、神からも、われらからも突き放されているのだ。おんみはルター派の教えをよび入れ、それに教会と説教壇とをささげ、悪魔の舌をして語らしめた。わざわいなるかな残虐王クリスチェルンよ!」。しかし農民と市民には、「庶民の王クリスチェルンよ! 農民は今後牛馬のように売りとばされてはならぬ。獵犬と交換されてはならぬ。この法律こそ、あなたの人物証明です!」と語らせている(アンデルセン 1874, 童話集 6, p.246)。

アンデルセンの宗教倫理の骨格は、それが厳密ではないとしても、ルターあるいはルーテル教会に支配的であった倫理観の影響を受けている。それはひと言で言えば、理想主義ではなく現実主義に基づく倫理観である。それは、理想主義的な神権政治とは違う、宗教的な息苦しさとは無縁の倫理観であり、いわゆる「二王国論」に基づく、現実肯定的な倫理観である。³

もちろん、アンデルセンは聖書とは別の倫理の源泉も持ち合わせていた。彼は子どもの頃、祖母が働いていた「精神病院兼養老院」の糸つむぎ部屋に入りびたって、祖母からたくさんのデンマーク民話を聞いていた。それは、キリスト教化される以前から語り継がれてきた民話であり、魔物や妖精や魔女が活躍するお話である。(ヴォルシュレガー 2000, p.22)

だからアンデルセンを突き動かす倫理性というものがあったとすれば、その思いはキリスト教化された北欧民話という形で結実したはずであり、数多あるアンデルセンの作品ひとつひとつに、その思いが宿っていると考えられる。

アンデルセンが紡ぎ出す「子ども目線」の死生観、倫理観を読み解くべく、以下に彼の代表的作品をいくつか取り上げて、これを論じたい。

～「死」についての考察～

アンデルセンの人間理解が、最も良く表現されている作品がどれなのかを同定することは難しい。しかし、既存の民話を基にしながら独自の結末を与えられた作品、「パンをふんだ娘」(アンデルセン 1859, 童話集 4)には、アンデルセンが思い描いた独自の人間観、死生観の反映を見て取ることが出来る。その粗筋は以下のとおりである。貧しくて見栄っ張りの娘が、裕福な家庭に奉公に上がった。1年が経って里帰りが許され、一番良い洋服を着て、お土産の大きな白パンをお屋敷の奥様から持たされて、故郷への道を急ぐ。細い道が沼地の中を通っている場所で、この娘は履いている靴を汚すのが嫌で、持っているパンを泥の中に投げ入れ、その上を踏んで歩くことにする。娘がパンの上に足を置いたとき、そのパンは石に変わって娘は沼の中へと沈んでしまう。アンデルセンはこの北欧民話に続きを書き加えて、新しい作品として発表した。インゲルという名のその娘は沼の底で、魔物たちと出会う。そして煉獄とおぼしき場所へと落ちていく。すると、燃えるような熱い涙が一粒、頭の上に落ちかかる。この娘の母親の涙である。娘が、パンを踏むという「罰当たり」なことをしたことは、みんなが知っている。「インゲルや、どんなにお前は、お母さんを悲しませたかしれませんよ」。その母の言葉を聞いて、インゲルは「わたし、生まれてこなけりゃ良かった」と考える。「心のおごった女の子。靴を汚すまいとて、パンを踏む」。国中でこんな歌が歌われている。煉獄にいるインゲルは、地上で人々が自分のことを話している、その声だけは聞くことが出来た。ある日、一人の無邪気な女の子がインゲルのお話しを聞き、泣きながら話している声が聞こえた。「で、もう二度とこの世へは戻ってこないの?」と女の子は母親に聞く。「もう二度と、この世には戻ってきませんよ」。「でも、ごめんなさいとあやまって、もう二度としませんと言っても?」。「けれどあの子は、ごめんなさいとは言わないでしょうよ」。「インゲルが、あやまるといいのにね!」

と、小さい女の子は言う。「もしこの世に戻ってきたら、わたし、お人形箱をあげるわ。かわいそうなインゲル！どんなに怖いでしょうね！」。この女の子の言葉は、インゲルの胸にしみた。無邪気な深い愛に触れたインゲルの心は、変わっていく。インゲルはやがて一羽の小鳥となって生まれ変わる。インゲルの小鳥は、麦粒やパンくずを見つけても、少ししか食べず、お腹をすかしている他のスズメたちに食べさせた。冬の間中、インゲルの小鳥はこうして、たくさんのパンくずを集めては、他の鳥たちに分けてやった。そのパンくずは積みもってとうとう、小さいインゲルが靴をよごすまいとして踏んだ、あのパンと同じくらいになった。こうして、最後のパンくずが見つかって、それを他の鳥にやると、インゲルの翼は真っ白になって太陽の光の中にのぼっていった・・・というお話である。

もともとの北欧民話としての「パンをふんだ娘」は、いわゆる因果応報の物語であり、食べ物を粗末にすることを戒める道徳訓話であった。しかしアンデルセンは、この道徳訓話をそのまま「良し」とはしなかった。沼の底に沈み、魔物の支配する世界で、石像のように動くことを許されず、ただただ後悔と絶望の日々を送るインゲルに、救いの機会が与えられる。アンデルセン自身はその「緒言と解説」において、次のように述べている。「以前からわたくしは『パンをふんだ娘』のことは聞かされていた。そのパンは石になって、娘といっしょに泥沼の中へ消えてしまったという話である。わたくしは、彼女を精神的に引き上げて、神のおゆるしとお救いにあずからしめようという課題と取り組んだ。そこからこの作品は成長したのである。」(アンデルセン 1874, 童話集 7, p.298)

「石をパンに変える」ことができるという、イエスの荒野の誘惑の話との関連性においても、この民話はもともとキリスト教的な道徳訓話であったと理解できる。しかし、私たちに与えられている生を、取り消し不可能な審判の場であると考えたのではなく、現世のみならず死後にいたるまで「神の恵みの場」として描くアンデルセンの信仰

は、やはり徹頭徹尾「恵みの先行性」を主張するルター神学の系譜にあるものだということが出来るだろう。

マルティン・ルターは、宗教改革の発端となったといわれる「九十五箇条の提題」において、現世ではない「死後の世界」について、「地獄、煉獄、天国」という便宜上の区分を受け入れている。その第十八条において、「煉獄にある魂が、功績や増し加わる愛の状態の外に置かれているということは、理性によっても、聖書によっても説明されているとは思えない。」(ルター 1517, p.12)と述べているとおりである。また、三十五条において「魂を(煉獄から)買い出し、あるいは、告解証を買いおうとしている者に、痛悔が不必要であると教える人たちは、非キリスト教的なことを説いている。」(ルター 1517, p.14)と述べているとおり、ルター神学における「悔い改め」の重要性は、説明するまでもない。そしてその「悔い改め」は、愛に触れてこそ起こるものであり、インゲルの場合彼女を「悔い改め」に導いたのは、会ったこともない幼い女の子の「真心」であった。

アンデルセンは死後の世界について、それが決定論的に語られることを回避すべく、幼い女の子の「幼稚性」における神への信頼(信仰)を根拠として、最後に「神の愛」がすべてを支配するという結論に導く。

死について語る場合、有神論であれ無神論であれそれが決定論的に語られる限り、そこに救いがあるとは思われない。生命主義も、狭い意味での救済論も「神の愛」の器としては小さすぎる。インゲルの罪をめぐっての、幼い女の子とその母親との会話は、人の認識を超える「神の愛」と、キリスト教が陥りがちであった狭い意味での救済論との対峙を表している。そして結論としては、どこまでも福音を追い求める「幼稚性」の倫理こそが、「ふさわしさ」という点において優位に立つ。子どもは、みんなが幸せになれる結論を探すのであって、何かのイデオロギーの勝利や、誰かの苦しみのうえに成り立つ正義を求めることはない。

たとえば現代の「安楽死・尊厳死論争」の場合、

個別の死についての物語を子どもたちが理解できるような仕方でも語ることができるのであれば、もはや自らの決断において死期を早めることに罪悪感を覚える必要はない。死に臨む人たちが、現実的に選ぶことが可能な選択肢を一つでも多く増やすことは、言うまでもなく行政に課せられた使命である。現実的には、臨床においては選択肢など無いも同然の状況下では、あらゆる選択肢が祝福されるとまでは言えないだろう。しかし、それぞれの倫理的決断を「良い知らせ」すなわち福音の物語として語ることさえできるならば、それはもはや「神の愛」のうちにある出来事なのであり、「ふさわしさ」においては正しい決断であるというべきであろう。

～「生」についての考察～

19世紀という時代を生きたアンデルセンにとって、人間の「いのち」をキリスト教的な視点でどのように考えるべきかという問題は、大きな課題であったと思われる。キリスト教倫理においても、理神論 (deism) に基づく合理的思考の影響を強く受けた人間観が支配的となり、「いのちの創造のみに関わる神」という神観が一般化していた。これはつまり、いわゆる「時計仕掛けの世界観」であり、神はすでにこの世界から「引退」しているという暗黙の了解である。

アンデルセンはその作品「ある母親の物語」(アンデルセン 1848, 童話集 3)において、生殺与奪の神についての、彼なりの信仰を明らかにしている。

これは、一人の幼児とその母親の物語である。ベッドに横たわるその幼子は、息も絶え絶えで、間もなく天に召されようとしている。母親は、もう三日三晩も寝ずの看病で疲れ切っている。そこに、みすばらしい老人の姿をした死神が入って来る。母親がまどろみかけたその瞬間、死神は幼子を持って出て行ってしまふ。気がついた母親は、表へ飛び出して必死に子どもの名を呼ぶ。その姿を見た「夜の妖精」「いばら妖精」「湖の妖精」が出す無理難題を引き受けて子どもの居場所を教

えてもらった母親は、満身創痍となり視力さえ失い、ようやく「すべての命が植物として育てられている死神の温室」へとたどり着く。温室の世話をしている「墓守ばあさん」に、美しい黒髪を差し出して、子どもの命を助ける方法を聞き出した母親は、死神と対決し、たまたま目の前にあった「命の木」「命の花」に手をかけると、「もし自分の子を助けてくれないなら、この花とこの木を引き抜く！」と叫ぶのである。「わしに逆らおうとしても、無駄だぞ。」と死神が言う。「でも神様なら、お出来になります！」と母親は返す。「その神様のおぼしめしを、わしはしているのみじゃ！」と死神は言う。「わしは神様のお庭番じゃ。わしは神様の花や木をみんな運んで、それを未知の国の大きなパラダイスの国に植え替えるのだ」。すると母親は叫ぶ、「あなたの花を、みんな引き抜いてしまいます。もうどうなったって、かまうもんですか！」。「おまえは自分が不幸だと言いながら、今また他の母親をも同じ不幸に落とそうとしているのだぞ！」という死神の言葉を聞いて、母親は我に返る。この後死神は、二人の人間の一生を母親に見せて、そのどちらかがこれから先の幼子の未来であると語る。大変に幸せな人生と、不安と恐怖に満ちた人生。母親は全てを理解し、最後に神に祈る。「神様！あなたのみに背きますような私のお祈りは、どうぞお聞き入れくださいますな。あなたのみ心こそ、この上ないものでございます。どうぞ、お聞き入れくださいますな！お聞き入れくださいますな！」。

母親にとって、幼い子どもを失うという悲しみ以上の悲しみはない。「生存権」や「幸福追求権」といった、近代以降に自明化していった諸権利についての発想は、言うまでもなく「為政者たち」に向けて要求されるはずのものであり、「引退した神」に向けて要求される権利ではなかった。しかしアンデルセンは、大胆にも「理神論の神」を現役復帰させるという試みに取り組もうとするのである。物語の中で、母親が対決する死神とは、もちろん創造神のことではない。それは、「時計仕掛けの世界」の管理人に過ぎない。それを、「秩序」や

「法則」と言い換えることも出来るだろう。この母親の異議申し立て、すなわちこの世に存在するあらゆる不条理に対する抗議は、彼女の叫びを聞いてくれるであろう神（創造神）の存在を前提としている。「でも神様なら、お出来になります！」という当初の母親の切なる願いは、決して叶うことはない。通常、なぜその願いが聞き届けられないのかを、信仰者が知ることはできない。しかしアンデルセンは、ただ神は沈黙を守り続けるのみであるという、ニヒリスティックな解釈に安住しようとはしない。それが明らかにされてはいないだけで、愛の神だけが知る理由があるはずだと考えるのである。

アンデルセンは、作家でコペンハーゲン大学学長を務めた A. G. エーレンシュレーガー (A. G. Oehlenschläger, 1779～1850) との対話を、自らの全集の「緒言と解説」に記録している。「永遠の生命」をめぐる対話の中で、エーレンシュレーガーの、「あなたは、この人生のあとに、また一つの生命があると、そのように堅く信じておいでなんです。」という問いに対して、強い口調で「人間はそれを要求することができます。」と答えている。エーレンシュレーガーが、「永遠の生命を要求するとは、あなたもまた、ひどくうぬぼれが強すぎませんか。神様はあなたに、この世で限りなく多くのものを賜ったではありませんか。」と応じると、アンデルセンは畳み掛けるように言葉を継ぐのです。「しかし、この世には、どんなに多くの人が、まったくもってそれとはちがった境遇におかれていることでしょう・・・これは正当なことではありません。神様がそんなことをなさるわけはありません。神様はきっとこの償いをしてくださり、私たち人間ではどうすることもできないことを高め、解決して下さるでしょう」(アンデルセン 1874, 童話集 7, p.299)。エーレンシュレーガーは、「永遠の生命」を「新たな無限の恩寵」として受けるべきであると、正統主義神学の救済論に基づいて語っているが、アンデルセンは自ら「無分別にも」と告白しているように、従来のキリスト教神学の枠には収まらない「救済の要求」を表明する。

これがアンデルセン独特の、「子ども目線のキリスト教倫理」を形成する「幼稚性」である。

「子どもたちを私のところに來させなさい。」と述べ、子どもたちとの対話を楽しんだであろうイエスが、子どもたちをただただ無力で従順な存在であると考えていたとは思われない。子どもは、気を許した大人に対しては、様々な要求を繰り返す存在である。そのことを知った上で、イエスは創造神である神を「父」と呼ぶことを推奨した(「主の祈り」マタイ 6:9, ルカ 11:2)。イエス自身は、神にアラム語で「アッパ」と呼びかけた(マルコ 14:36)が、この「アッパ」は「父」と訳すよりも「お父ちゃん」と訳すことがふさわしい幼児語であったと考えられる。⁴ 神が「お父ちゃん」であれば、「どうして?」「何で?」と問うことも許されるということだ。

どんなことがあっても、我が子には生きて欲しいと考えるのが親心である。それは、我が子には幸せを享受して欲しいと考える自然な親の思いであろう。でも現実には、生き延びた我が子が幸せを享受できる保証はない。

幼い子どもを失った親についてのモチーフは、アンデルセンの作品「砂丘の物語」(アンデルセン 1859, 童話集 5)にも現れている。ユトランド半島の砂丘にある教会の物語である。9月の末の日曜日、貧しい漁師の夫婦が、礼拝を終えて教会から出て来る。「きょうのお説教はいいお話だったな。」と、夫は言う。「神さまがいらっしゃらなかったら、わしらには、なんにもありゃしないんだ。」「そうですとも。」と、妻は答える。「よろこびも悲しみも神さまあつてのことですよ。神さまのお心のままですよ・・・わたしたちの坊やも、生きていれば明日で五つになりますね」「今さら泣き言を言ったって、はじまらんよ。」と夫は言う。「あの子はこの世の苦勞を、じょうずにのがれたようなものだ。そして、いずれはわしらも行かねばならないところにいるのだよ。」

「幼稚性」と「子ども目線」というキリスト教倫理の規範を提案するにあたって、最も考慮すべきは悲嘆に暮れる人々の存在である。そのことに異

論は無い。しかし、「子ども目線」と言うからには子どもの語る言葉に耳を傾けなければならない。

誰もが知っているアンデルセンの代表作「マッチ売りの少女」(アンデルセン 1845, 童話集 2)は、幼い少女の独白の物語である。極貧のなか粗暴な父親から「マッチ売り」を命じられた少女は、大晦日の寒い日にマッチを売り歩く。マッチは売れず、母親譲りの木靴も失った少女は、街角の物影にうずくまっている。少女は、マッチを一本する。まるでピカピカした大きな鉄のストーブの前に座っているような気持ちになった。二本目のマッチをすると、家の壁が透き通って、おいしそうなごちそうが見える。三本目のマッチをすると、この上もないきれいなクリスマスツリーが見える。何千というロウソクが枝の上で燃えていた。マッチが消えると、ロウソクの明かりは、高くどこまでも高く空へ登って行く。四本目のマッチをすると、もう数年前に亡くなった優しかったおばあさんが見えた。少女は叫ぶ、「わたしを連れて行ってちょうだい！だって、わたし、知ってるわ。おばあさんはマッチが消えると、行ってしまうんでしょ？」。少女は残りのマッチを全部すった。すると、おばあさんは小さい少女を腕に抱き上げて、光と喜びに包まれて高く高くのぼって行った。そこにはもう、寒いことも、お腹のすくことも、怖いこともない。二人は神様のもとに召されたのだ(アンデルセン 1845, 童話集 2, p.301)。

この「マッチ売りの少女」を、ただただ哀れな少女の可愛そうな物語だと断定することは、この物語を著したアンデルセンの意図に沿うことではない。少女がマッチの炎のなかに見た光景は、ただの幻に過ぎないと大人は判断する。しかし、おばあさんに抱き上げられて天にのぼる少女は、「光と喜びに包まれていた」とアンデルセンは確信している。そして物語はこう締めくくられる。「この子は、あたたまろうとしたんだね、と、人々は言いました。だれも、この少女がどのような美しいものを見たか、また、どのように光に包まれて、おばあさんといっしょに、新しい年の喜びをお祝いしに行ったか、それを知っている人はいません

でした」。大人が知っていることだけが、真実なのではない。アンデルセンは、そう言いたかったのではないか。

たとえば私たちが、人工妊娠中絶の是非を論じる場合、物言わぬ胎児の意見を代弁しようとすれば、そこには一方的で生命主義的な「生の肯定」と「死の否定」が表明されることになるだろう。しかしそれが「一方的」であることに注意を払う者は少ない。私たちは、それが可能であるならば命を宿した母親と、そこに宿った胎児の双方の声を聞くべきである。馬鹿げた主張であると言われることを承知で言いたい。宗教倫理は、それを可能にするためにあるのではないかと。

結びに向けて、新聞に掲載された「大切な我が子」と題された読者投稿の文章を紹介したい。「今年に入って、9カ月のおなかの子を亡くした。死産は2度目であり、まだ日が浅いなか、なんとか元気に毎日を過ごしているが、時々弱音を吐くこともある。先日、4歳の長男に寝る前の布団の中で『赤ちゃん元気に産んであげられなくてごめんねって思うんだ』とこぼしてしまった。静かに聞いていた長男は私の顔をのぞき込み『お母さん、どっちでもいいんだよ』と言った。思わぬ言葉に、私はその真意をものすごく知りたくなった。なるべく穏やかにと自分に言い聞かせて聞いた。『どうということ？何がどっちでもいいの？』少し間を開けて彼は『元気に生まれても、元気に生まれなくても、どっちでもいいんだよ』。それだけ言ってまた横になった。その時はお互いそれ以上のことは言わなかった。ゆっくり冷静に考えた。そうだ。これが長男の声、亡くした赤ちゃんの声としたら・・・。元気でも、元気じゃなくても、みんな同じ大切な我が子。私と夫の所に来てくれた。亡くなった子がおなかにいた間、確かに幸せだった。どの子もみんな幸せを持ってきてくれた。死産の2人は、ただ少し早くお空に帰っていったかもしれないけれど。そうだ。ただそれだけに感謝しよう。来てくれたことに。そう考えると、長男の言葉がしっくりくる。大げさかもしれないが、暗雲が去り、晴れ渡る空のように心がすっきりした。この

言葉をこれからの支えにして、がんばれる気がした。」⁵

『お母さん、どっちでもいいんだよ』という4歳の男児の言葉は、もちろん亡くなった胎児の言葉ではない。しかし、もし胎児の語る言葉を聞くことが出来るとしたら、その言葉はやはり『お母さん、どっちでもいいんだよ』という言葉だったのではないかと思う。子どもの幸せが親の幸せなのだとすれば、親の幸せは子の幸せと言うことも出来るだろう。親の幸せを望まない子はいない。人工妊娠中絶は、女性の権利としてこれを無制限に認めるべきであるとは思わない。しかし、これを認めざるを得ないケースがあることを許容すべきである。

「幼稚性」は、硬直化したイデオロギーとは無縁である。「子ども目線のキリスト教倫理」は、苦渋の決断にも福音が隠されているということを、見出すことであろう。

～結語～

幼い子どもに善悪を教えることは、思いの外難しい。幼い子どもは、言語化されない感情を持っていて、その言語化されない感情に訴えない道徳教育は必ずや空回りに終わる。「腑に落ちる」という言葉があるが、子どもたちはそれが「腑に落ちる」と思われることについては、これを素直に受け入れる。そうでない事柄については、表面的には肯定したとしても納得できない出来事として残る。

歴史的に、キリスト教倫理の規範は「愛」であると考えられてきた。しかし、「愛」を定義することはことのほか難しい。一方で「幼稚性」と言うと、「愛」に比べればはるかに現実的な規範であるように思われる。様々なイデオロギーから自由になり、スケープゴートをつくらない。どちらか一方を悪とするような思考パターンは、「幼稚的」ではない。幼稚園や保育園で日常的に起こる喧嘩の仲裁は、保育者の力量が試される場面である。大きな非がどちらか一方にある場合でも、双方に言い分はある。そして多くの場合、双方が我慢す

ることでしか解決はおとずれない。最も大切なのは、そこで我慢した子どものことを理解する大人の存在である。だから、神の存在を明言できる宗教倫理だけが、「幼稚性」をその規範とすることができる。最終的には、「神の眼差し」だけが苦しい倫理的判断における癒やしの源泉であり、それ無しには、すべての人にとっての福音となる倫理的判断は成立しないからである。

引用・参考文献

- ヴォルシュレガー (2000), ジャッキー、安達まみ訳『アンデルセン—ある語り手の生涯—』岩波書店 2005 年、(Jackie Wullschlager, *Hans Christian Andersen—The Life of a Storyteller*, Allen Lane The Penguin Press)
- Bauer (1958), Walter, *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*, The University of Chicago Press
- NTD (1973), ゲルハルト・フリードリヒと監修『NTD 新約聖書註解2』NTD 新約聖書註解刊行会、1978 年 (Gerhard Friedrich, *Das Neue Testament Deutsch*, Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen)
- IBC (1998), *The International Bible Commentary*, The Liturgical Press, Collegeville, Minnesota
- Miller-McLemore (2003), Bonnie J., “Let the Children Come: Reimagining Childhood from a Christian Perspective”, Jossey-Bass A Wiley Imprint, CA
- フレッチャー(1966), J.『状況倫理:新しい道徳』新教出版社、1971 年 (Joseph Fletcher, “Situation Ethics: The New Morality” Westminster Press, Philadelphia)
- アンデルセン(1874), ハンス・クリスチャン、大畑末吉訳『完訳アンデルセン童話集1～7』岩波文庫、1984 年(文中の略号「アンデルセン」の後に記す年号は、それぞれの作品が発表された年を表す)
- ルター (1517), マルティン、徳善義和訳『ルター著作選集』教文館、2012 年 (Martin Luther, *Disputatis pro declaratione virtutis indulgentiarum*. WA 1,233-238, Cl 1, 3-9, *Ausgewählte Schriften*)

注

- 1 デンマーク・オーデンセのシダンスク大学アンデルセンセンターが公開する、ラース・ボー・ジェンセン氏の「アンデルセンの宗教性についての参考文献」によれば、第二次世界大戦以後の研究文献は12冊のみである。そのほとんどがデンマーク語文献であり、思いの外ア

ンデルセンの宗教性についての研究書は少ないことが分かる。

LARS BO JENSEN, Syddansk Universitet, 2004

(http://andersen.sdu.dk/forskning/motiver/religion_e.html)

- 2 彼の家系はユダヤ系ではない。
- 3 ルター 1517、「この世の権威について、人はどの程度までこれに対し服従の義務があるのか」381 ページ以降参照。
- 4 『新共同訳新約聖書註解一』日本基督教団出版局、1991 年、p.247 参照
- 5 毎日新聞東京版、2016 年 4 月 20 日「女の気持ち」(千葉県、主婦、35 歳)

The Ethical View of Andersen's Tales - Christian Ethics based on a Child's Point of View -

Yasunori Tajima

Joseph Fletcher described that the ruling norm of Christian decision is love; nothing else. Nevertheless, few people could believe that his opinion itself was guided by love. As indicated by Jesus' words and actions, love was not the only norm of the Christian. As Jesus said; "Truly I tell you, unless you change and become like children, you will never enter the kingdom of heaven." (Matthew 18:3) This expression implies another norm of Christian ethics; that of "being like a child." I try to describe Christian ethics based on this point of view, through the works of the world famous author of children's literature, Hans Christian Andersen (1805-1875).

Keywords: Christian ethics, childlikeness, Hans Christian Andersen, euthanasia, abortion